

時代を超えて、リストのレッスンを聴講する——



ヴィルヘルム・イエーガー 編
内藤 晃 監修・訳
阿部貴史 共訳

A5判・208頁 ISBN 978-4-276-20042-5
定価 3,190 円（本体 2,900 円+税 10%）

弟子であり秘書も務めたアウグスト・ゲレリヒによる師匠のマスタークラスの記録。自身の作品に加えて、ショパンやシューマン、ベートーヴェンなどの作品を教えていたリストが、どのようにこれらの作品を捉えていたのか。また、同時代の作曲家との思い出話など、演奏史・音楽史の観点から貴重な証言が満載。全編をとおしてユーモアにあふれており、リストと受講生たちとの生きたやり取りを身近に感じることができる。訳者による詳細な注釈や譜例も充実。

まえがき（ヴィルヘルム・イエーガー）
序——ゲレリヒの日記について（ヴィルヘルム・イエーガー）
日本語版の凡例

ゲレリヒの日記	第1章	ヴァイマル	1884年5月31日	～1884年6月6日
	第2章	ヴァイマル	1885年6月16日	～1885年6月27日
	第3章	ヴァイマル	1885年6月28日	～1885年9月9日
	第4章	ローマ	1885年11月11日	～1886年1月12日
	第5章	ブダペスト	1886年2月18日	～1886年2月25日
	第6章	ブダペスト	1886年3月1日頃	～1886年3月6日
	第7章	ヴァイマル	1886年5月17日	～1886年5月31日
	第8章	ヴァイマル	1886年6月15日	～1886年6月26日

本書のマスタークラスの主な出席者たち
参考文献 / 訳者あとがき（内藤 晃） / 曲名索引

第1章
ヴァイマル
1884年5月31日-1884年6月6日

レッスン1

5月31日 土曜日 午後4時-6時

- ラグ「組曲」
- スタンパード「ピアノ協奏曲1楽章 Op.15 第1楽章」
- フリスト「藍札の年 第2年イリア」
- フリスト「3つのワルツ・ネグリス」
- マクドナルド「ソナタ」
- ヨゼフ・ブラーム「ソナタ」
- ヨゼフ・ブラーム「ソナタ」

1 「美しい曲だ!」。

2 「最高のところで、「ペダル」」。

3 「良い演奏だ」。

4 「そんなに遅くせず、もっとでしゃばって」「スベテアムを弾出するんだ!」、ハンダチーの民族的要素を弾立たせた。バスをしっかりと。"節用"に弾き残さないように。つまり、貴族に聴こえないように、「こんなくだらない曲を弾いてくれやうが」と。

5 「ソナタのワルツを聴いた後、「良かったよ」「今日もうこれ以上聴かないな」。アプレスタでソナタを終えたかったようだ。モーツァルトのオペラ「ドン・ジョヴァンニ」の隠された4行を弾いていいか尋ねられたが、断固として「ファン・デル・ヴェルトからも「大演奏会用協奏曲」S.176を弾いて同様に弾いた」。

レッスン7

6月1日 日曜日 午後4時

- グラムス「ピアノ協奏曲第2巻 変長調 Op.83」
- ショパン「ノクターン長調 Op.37-2」
- ショパン「幻想即興曲 第4楽章 Op.66」
- スタンパード「エチュード」
- シューベルト「オラト・コンダタの舟人 S.559」

1 「この作品はブラームスの最高傑作のひとつだ。ブラームス本人はいい演奏に弾いてしまいがちだが、シューマンも楽しんで弾いてくれる。美しい場所にある!」「ここは、ブラームスがイタリアの広大な音空を想って書いたところだ!」。

2 「テーマを拡大して弾いてみて、「これは実にすばらしい。そんなに"音楽家っぽく"弾いたらだめだ(練習3-5)」。

3 「この曲はUna cordaで弾くこと、ただし、音量はかなり大きくして、32小節のテーマについては、「このように、北ドイツのいくつかの音楽にはない、いかにもワグナーっぽいワグナーだ(練習3-7)」。

4 「40小節からは、スケルトンのリズムを弾立たせると、特に48小節からは、楽譜で指示されているように左手のスケルトンを十分に強調させて、cantandoと記された部分(74小節)については、「Cantandoを書き足しても大丈夫だと思ったんだ。それを知っても、シューベルトは反論しないだろう!」最後の、書き足された低い音は弾かないでいい。最近こういう終わり方はあまり好きじゃなくなっている」。

譜例を豊富に
用いて解説

最後に、ある女性が何か強きかっていた。それに対して、「2時間以上これほど集中して聴くのは無理だ。調子が悪くなる。君たちもそんなことを望まないだろう」。(約25人出席)

6月1日 日曜日(無休) 午後4時-6時 シュタル特約にて

- 1 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 2 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 3 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 4 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 5 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 6 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 7 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 8 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 9 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 10 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 11 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 12 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 13 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 14 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 15 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 16 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 17 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 18 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 19 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 20 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 21 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 22 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 23 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 24 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」
- 25 フリスト「交響詩(ハムレット) S.644」

1 「クワイマックスの7ページ(69小節)で、「美しいね」と言い、近くに着いていた人たちに一言二言コメントした。10ページ(104小節)で、舞臺は再び上がり、スコアを見て「すばらしい」。2分の3拍子になる最初の小節(162小節)で、この場面について「オフェリア」を象徴していると思った。次の2分の3拍子の場面(204小節)で「またオフェリアだ」。最後に力強く拍手した。「実に知的でいい演奏だった!」。

2 「(森のざわめき)のあと、脚匠は「小人の踊り」を聴きたがった。

3 「空気が悪いぞ?もう30分経ってしまった」と、座席第一。2台のピアノの間に座席をとると、ときどき指揮をしなが、注意(演奏を聴いた。終わりに近くで「ますます悪くなるぞ!」)に響いたら最後は7階まで行進した!。ネクターのテーマは差

当時のレッスンを
詳細に記録

トリオ (152小節)に最初に戻し直した。初めて「すばらしい」と叫んだ。2回目のトリオ (183小節)でわたしたちのパート (第2ピアノ)がオクターブで入ると、同時に「ペダルははげすんで使う。ほとんど踏まないように」。タンポはそこまで遅しなかった。トリオのテーマが3連符で登場するところ(296小節)では、かなりテンポを遅くして、決してタラタラと弾かないように!

1 「速く弾いてテンポがよかった。脚匠は数小節弾いてみた。指示がAllegro moderatoとAllegro agitatoのどちらなのか、大きな論争があったよだ」。

2 「2台のピアノ(練習3-6)があまりにも遅く弾かれると、コミカルに弾く。口を開き続け、息を大きく吸い込み、かなり苦悶した様子で弾いてみた。そして、テーマを弾いた」。

3 「練習3-4 ショパン: 幻想即興曲 Op.66

4 「「素敵な曲だね!」次のレッスンでは、スタンパードのコンチェルトを弾いていいよ。ぜひ聴いてみたいものだ。ザクザクが伴奏としてあるよ。さて、音は美しい場所にあるんだ。男どもはみんな自分でピアノをまくるから、耳の肥えたいやな聴衆なのだよ」。

5 「わたしは脚匠に、いつか(ハンダチーの)神を弾かせていただきたいと申し出た。「喜んで君にはピアノ協奏曲を贈るよ」11。そのときは、何か君へのメッセージをそこに書こう」。ピアノの上でその楽譜を弾いてくれた。

6 「さて、今日は、前人に聴かせるような曲しかなかったのかね?」「ああ、そだね。これは良い曲だよ」。

7 「バスは常に、隣で取るように、タンポは遅くしすぎず、スケルトンを常に強調すること。この曲はUna cordaで弾くこと、ただし、音量はかなり大きくして、32小節のテーマについては、「このように、北ドイツのいくつかの音楽にはない、いかにもワグナーっぽいワグナーだ(練習3-7)」。

8 「40小節からは、スケルトンのリズムを弾立たせると、特に48小節からは、楽譜で指示されているように左手のスケルトンを十分に強調させて、cantandoと記された部分(74小節)については、「Cantandoを書き足しても大丈夫だと思ったんだ。それを知っても、シューベルトは反論しないだろう!」最後の、書き足された低い音は弾かないでいい。最近こういう終わり方はあまり好きじゃなくなっている」。

譜例3-4 ショパン: 幻想即興曲 Op.66

11 「この曲はブラームスの最高傑作のひとつだ。ブラームス本人はいい演奏に弾いてしまいがちだが、シューマンも楽しんで弾いてくれる。美しい場所にある!」「ここは、ブラームスがイタリアの広大な音空を想って書いたところだ!」。

12 「テーマを拡大して弾いてみて、「これは実にすばらしい。そんなに"音楽家っぽく"弾いたらだめだ(練習3-5)」。

13 「この曲はUna cordaで弾くこと、ただし、音量はかなり大きくして、32小節のテーマについては、「このように、北ドイツのいくつかの音楽にはない、いかにもワグナーっぽいワグナーだ(練習3-7)」。

14 「40小節からは、スケルトンのリズムを弾立たせると、特に48小節からは、楽譜で指示されているように左手のスケルトンを十分に強調させて、cantandoと記された部分(74小節)については、「Cantandoを書き足しても大丈夫だと思ったんだ。それを知っても、シューベルトは反論しないだろう!」最後の、書き足された低い音は弾かないでいい。最近こういう終わり方はあまり好きじゃなくなっている」。

編者：ヴィルヘルム・イェーガー (1902-1978)

オーストリアの作曲家・指揮者・音楽史学者。ウィーン国立音楽大学で学び、ウィーン国立歌劇場のコントラバス奏者を務める傍ら、ウィーン大学で音楽学を専攻、1938年からは教鞭をとった。ウィーンフィルハーモニー理事、ウィーン市議会議員、リンツのブルックナー音楽院の校長などを歴任。

監修・訳：内藤晃

ピアニスト、指揮者、作編曲家。東京外国語大学卒業。自身のCDに「Primavera」(レコード芸術特選盤)、「言葉のない歌曲」(同準特選盤)などがあるほか、マリンバ吉川雅夫氏や作曲家春畑セロリ氏のCDでピアノを務めるなど、一流ソリストや作曲家からも厚い信頼を寄せられている。文筆活動にも広く取り組み、月刊音楽現代に「名曲の向こう側」を連載するほか、校訂楽譜に「ケクラン やさしいピアノ作品集」(音楽之友社)などがある。

共訳：阿部貴史

青山学院大学文学部卒業。University of Bath MA Interpreting and Translating 修了。現在、都内の大手特許事務所にて翻訳業に従事しつつ、ピアノソロ・アンサンブルの演奏活動を行う。

音楽之友社
〒162-8716 東京都新宿区神楽坂 6-30
TEL 03-3235-2151(営業)
FAX 03-3235-2148
<https://www.ongakunotomo.co.jp/>